

NUPRI NEWS

Nagano Urban Policy Research Institute

NPO法人
長野都市経営研究所

Vol.69

2024.APR.

NPO法人 長野都市経営研究所

発行日/2024年4月22日 (年4回)

発行/NPO法人 長野都市経営研究所 〒380-0834 長野市大字鶴賀問御所町1289-1 丸本ビル2F TEL 026-235-7911 FAX 026-235-6166 <https://www.nupri.or.jp> E-mail: nupri@nupri.or.jp



市村次夫 理事長

市村次夫理事長は、日頃よりNUPRIの活動につきまして、格別のご理解とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

■地域活性化のために総力を結集

理事長あいさつ

去る2月20日、「NUPRI全体懇談会」が役員・会員合わせ40余名の出席により開催されました。コロナ禍によってNUPRIの活動も中止、縮小されていましたが、政府による5類感染症移行に伴い、様々な取り組みが再開されています。今年3月16日に北陸新幹線金沢―敦賀が延伸開業し、北陸はもろろん関西方面からの集客も見込まれ、地域交流や観光振興、ビジネスでも大きな効果が期待されます。全体懇談会では、改めて長野市の地域づくり、まちづくりへの責任と使命を会員の皆様と共有し、今何をす

NUPRIは、長野市を中心としたオリンピックゾーンの将来のあるべき姿を研究し、その実現に向けて提言・実践活動をしていく団体でございます。1994年に設立され、2001年にはNPO法人として認証を受けました。長野市には、同じような活動をしている経済団体がいくつもあります。長野市街地を中心とする幅広い地域から会員が集まっていること、そして提言だけでなく具体的に行動を起こすことを大きな特徴としております。本日は、講演会の講師として(株)文藝春秋の中部嘉人氏をお招きしています。出版業界の現状と将来性、文化事業等についてお話をいただけるのではないかと期待しております。全体懇談会は、形にとらわれない柔軟な発表の場ござ

NUPRI 全体懇談会
令和6年2月20日
14時30分～
ホテル国際21にて開催

NUPRIの原点を見つめ直し さらなる発展へとつなげる

べきかを真剣に考える場となりました。各部会の活動報告と今後の活動方針に続いて、この日は日本銀行松本支店の山本格支店長にNUPRIへのエールとして、長野県経済についてお話をいただきました。また、会場を移した講演会では、長野県出身者で初めて株式会社文藝春秋の代表取締役社長となり、現在は相談役に就任されている中部嘉人氏の講演を開催しました。さらに懇親会では、中部嘉人氏を交えながら、なごやかに親睦が図られました。



祝電

長野市長 萩原健司様より

NPO法人長野都市経営研究所 全体懇談会のご開催を心からお喜び申し上げます。関係各位の並々ならぬご尽力に敬意を表しますとともに、ご参加の皆様方の益々のご健勝ご活躍をお祈りいたします。

います。本日も会員の皆様の創意と行動に感謝申し上げます。将来のさまざまな活動につなげるべく、有意義な懇談会、懇親会にしていきたいと考えております。

各部会中間活動報告と今後の活動方針

産学連携部会

長野県立大学との連携事業



掛谷嘉則 理事

長野県立大学との連携事業を継続していくなかで、1月19日にNUPRI課外ゼミナール

(経営者に学ぶケーススタディ)を開きました。大学から7名、NUPRI4名、企業側から八十二銀行様、シューマート様が出席され、講演をしていただき、その後ディスカッションを行いました。県立大学には、起業家を志望する学生が多くいます。その学生と会員企業が触れ合う機会をつくることで、学生の意見を企業の活性化に反映させ、またNUPRIにとってもまちづくりへの新たな視点が開造できると考えています。

今後とも学生に「働く」ことを通して地域との関わり、企業内での「自分のあり方」を深化できるよう、会員の皆様の意見を聞きながら進めていきたいと思えます。

「まち」掘れ！長野調査隊

魅力スポット、歴史遺産を再発見

竜野泰一 調査隊長



本事業の活動趣旨は、長野市内の隠れた魅力を見直し、再発見して、長野地域の多様な魅力を市民や

観光客に発進することにあります。今年度は、山城めぐりを企画しましたが、残念ながら中断いたしました。引き続き、長野地域の隠れた魅力スポットや歴史遺産を新鮮な視点で調査・探索し、長野地域の観光振興の一助としていきたいと考えております。

「花遊歩―牛に引かれて」

善光寺参り

「まちの奥見」で往時に

思いを馳せる

鈴木隆治 事務局次長



昨年5月4日、第11回「花遊歩―牛に引かれて」善光寺参りを開催しました。

71名の着物姿の女性陣にご参加いただき、盛大なフィ

ナーレを迎えることができました。この場をお借りして、皆様に御礼を申し上げます。

令和6年は、5月11日(土)に「まちの奥見」を行います。善光寺表参道の本店にお邪魔し、普段は見ることのできない奥の間等を見学するイベントです。お店の成り立ちや歴史についてのお話を聴きつつ、抹茶を頂戴しながら門前の古き良き時代に思いを馳せる。基本的に、着物姿での参加をお願いしたいと考えています。詳細はまだ決まっていませんが、皆様にもぜひご参加お願いいたします。

中心市街地活性化部会

商業・居住を集積し、

活性化を図る

倉石智典 理事



長野市や長野商工会議所、まちづくり長野と定期的な意見交換を行い、具体策を提言してい

きたいと思えます。また、中心市街地への移住を考えている学生や就業者が集まる拠点として、空き家の活用を考えるなどの支援を行いたいと思えます。

もんぜんぶら座利活用プロジェクト、権堂エリア利活用プロジェクトを推進し、特に権堂エリアについては何度も討議を

新産業創出部会

第24回収穫祭を開催

竹内伊吉 理事



りんごの木オーナー制度は24回目を迎え、昨年11月19日に収穫祭が行われました。また、

三水米の生産・販売も行っており、こちらも好調な売れゆきです。ただ、生産者の高齢化、後継者問題等、農業問題に正面から向き合わなければならない時期に來ておりますので、皆様からの忌憚のないご意見も頂戴したいと考えております。よろしくお願いたします。

スポーツ振興活動部会

「前へ！」「前へ！」

鷲澤幸一 副理事長

いつもAC長野パルセイロをご支援いただきたきありがとうございます。NUPRIとしても株式を持つておりまして、経営に参画しています。今年から、J2に昇格する条件が変わります。上位2クラブが昇格し、さらに3位から6位でプレーオフが行われ、そこで優勝した



1クラブが昇格となります。レディースチームとともに1試合1試合を懸命に戦い、AC長野

パルセイロトップチームはJ2へ、レディースチームはさらなる上位躍進を目指します。

■地域野球クラブ「信越硬式野球クラブ」の応援活動

長野市をホームに全国制覇へ



茂谷浩子 会員

今年度、信越硬式野球クラブは5年ぶりに全国大会に出場し、14年ぶりとなる初戦突破を果た

しました。勢いそのままに2024年は、酒井新監督のもと、社会人野球の二大タイトルである「都市対抗野球大会」と「社会人野球日本選手権大会」の出場を目指し、日々猛練習に取り組んでいます。また、今年も青少年の育成、地域スポーツ文化の醸成を目的に「少年野球教室」等を開催します。長野市に本拠地を置くクラブチームとして、強いチームであること、地域社会に貢献し愛されるチームであることを目指し活動していきます。

ます。

■わいがやサロン活動部会

原点に戻り、ビジョンを共有

岩野彰 事務局長



会員の皆様との交流機会を増やすとともに、各分野で活躍する方をお呼びし、組織の活性化につなげたいと考えております。

先日、本棚の整理をしたところ、1997年2月6日付の日経新聞が出てきました。そこにNUPRIの活動に関する記事がありました。当時は、長野市



日本銀行松本支店 支店長

山本格氏のごあいさつ

長野県の経済は、緩やかな持ち直しの状況が続いています。企業の収益を見ると、大企業が収益的に改善してきていますが、業種によってもばらつきが見られます。例えばコロナ禍で抑制されていた旅行や外食などの需要は増えており、さらにインバウンドの需要増加が加わって、県内の宿泊・飲食サービス業、あるいは小売業は追い風となっています。長野県は、製造業の比率が高いことが特徴ですが、県内の工業製品の生産高は、ここ半年ほど横ばいの動きとなっています。

方にお越しいただけるように、皆様のご意見をお聞きしながら有意義な講演会にしたいと考えております。

の企業約300社で組織する団体ということで非常に注目されていたことがわかります。6月からは、また若い力をお借りしながら改革を進めたいと思います。新体制のなかで会員増員が図れればと考えておりますので、引き続き皆様のご支援・ご鞭撻をお願いいたします。

■講演会開催事業

市民に開かれた講演会

鈴木隆治 事務局長次長

今回は、長野県で初めて(株)文藝春秋の社長に就任された中部嘉人氏をお迎えします。また、6月13日の定時総会には、インダストリアルデザイナーの水戸岡鋭治氏にご登壇いただく予定です。大勢の



続いて雇用環境ですが、様々な企業で人手不足が生じており、こうした動きはやはり賃金を押し上げていく要素になります。具体的な賃上げの幅は、他社の状況を見ながら決めていく企業が多く、人件費の販売価格の決定が難しいという側面があります。この点、私共としても春季労使交渉の動向をしっかりと確認していきたいと考えています。

現在、日本経済は転換期にあるんじゃないかと思っています。長野県の産業を振り返ってみると、県内企業の多くは大事な時に環境変化に対応し、ひいては我が国の産業構造の転換を実現してきた歴史があります。県内企業は、長い歴史に培われた変化のDNAを有しており、様々な工夫や産官学の連携が実を結んできました。そういうことも含めて、私はNUPRIには大変敬意を持っており、今後も一層のご活躍を期待しています。

文藝春秋の100年と

出版社の経営

講師 株式会社文藝春秋相談役 中部嘉人氏



全体懇談会に続き、(株)文藝春秋・相談役の中部嘉人氏の講演会が一般公開で開催されました。中部氏は、人気雑誌「月刊文藝春秋」を刊行する(株)文藝春秋で長野県出身者として初めて代表取締役社長に就任された方です。一般聴衆100名の募集を上回る応募をいただき、集まった約130名の方々が中部氏の興味深い話に耳を傾けました。約90分間の講演を抜粋掲載します。

大学時代に、映画サークルを創設

私は長野市で18歳まで過ごし、浪人生となって東京の予備校に通いました。親元を離れた解放感もあり、受験勉強よりも遊びに夢中の不真面目浪人生だったのですが、その頃下宿先で一人の先輩に出会いました。その人が、「月刊文藝春秋」の愛読者だったので。拝借して読み進めるうち、「なんとなくいっぱしの大人になったような気分」を感じ、「意外に読みやすく面白」と思えたことが文藝春秋との最初の出会いです。

浪人二年目になってさすがにこれではまずい、と身を入れて勉学に励み、新聞社などのマスコミを志して同志

社大学文学部社会学科新聞学専攻に進みました。大学では、同専攻の仲間と8ミリ映画、ミニコミ誌、バンド活動を行うサークルを勝手に立ち上げ、私は映画部門の初代リーダーとして映画監督みたいなことをしました。今もそのサークルは続いていて、大学公認の大きな映画サークルに育ったことがとても嬉しく、誇らしく思っています。

大学を卒業して入社したのは、電機業界の専門新聞を発行している電波新聞社です。記者として製品の開発ストーリーを書いたり、雑誌の編集をしていました。6年ほど勤めていた時、文藝春秋の中途採用を知り勢いこんで面接に臨んだのですが、「経理の席が空いているんだけど？」と言われて、ここは経験値ゼロでも「やります！」

【中部 嘉人氏】プロフィール

1959年生まれ、長野市出身。1975年、信州大学教育学部附属長野中学校卒業。1978年、長野県長野高校卒業。1984年、同志社大学文学部社会学科新聞学専攻卒業。1984年、(株)電波新聞社入社。月刊「OAパソコン」、月刊「電気店」編集部、単行本編集。1989年、(株)文藝春秋入社。経理局、のちに営業局(取次・書店営業)配属。2014年、取締役経理局長。2017年、常務取締役。2018年、代表取締役社長。2023年、相談役に就任、現在に至る。

と即答して採用してもらいました。しかしいざ経理部に配属されてみると、書類と伝票の数字ばかりの生活が延々と続くことに疑問を感じてきて、本に携わる仕事がしたいと志願して営業部に異動しました。書店営業を14年ほど勤めてから、再び経理部に戻り、2018年に文藝春秋の13代目となる取締役社長に就きました。社長を5年間勤めて昨年の6月に退任、今は相談役という立場にいます。

無二の親友の名前を 文学賞に冠した菊池寛

文藝春秋は、作家の菊池寛が創業した会社です。1923年のことですから、今年で101年目を迎えます。菊池寛は幼少期から勉強ができただけでなく、やんちゃながらもごく魅力的な人物で、みんなから敬愛されています。高松の没落士族の家に生まれ、非常に貧しかったために教科書は友達から借りて書き写したものを使っていたそうです。成績優秀で東京師範学校に推薦入学しましたが、1年で除籍となっています。何があったかというと、東京師範学校は品行方正、学業優秀、穏健などを掲げる厳格な校風があり、これに馴染めなかったようです。馴染めないうえに、先生に反抗的な口答えをしたため除籍になりました。やるときはやるが、言いたいことは言うという自由奔放な性格です。

菊池は猛勉強のすえ一高（東京大学）に入り直し、ここで文学を志します。ところがここでも友人の罪をかばい、退学させられました。後に「マント事件」として知られる出来事です。その後、改めて京都帝国大学に入學し、卒業後は時事新報社に入社して小説を発表、



1918年に『無名作家の日記』によって流行作家としての地位を確立します。

文藝春秋の歴史を紐解きますと、1935年に芥川龍之介賞と直木三十五賞を制定しています。これは、菊池が亡き友の名

前を後世に残す目的で創設した賞で、今では日本で一番有名な文学賞となりました。芥川龍之介と菊池は、一高時代の出会いです。当初は、菊池は芥川のことをいけ好かない気取った奴だと思いついていたらしいです。それが学生寮で野蛮な田舎者と思つていたらしいです。それが学生寮で寝食を共にして会話を重ねるうちに、無二の親友と呼べるまでの仲になったそうです。

ご存知のように、芥川は1927年に自殺しています。自殺の数日前に、芥川は2度、菊池を会社に訪ねています。しかし不在で、芥川が自分を訪ねてきたことも知らされなかったそうです。菊池のシヨックは相当なもので、葬儀の時は嗚咽しながら弔辞を読んでいます。直木三十五ですが、この人は文藝春秋の編集者であり、小説家でした。彼は1934年に43歳で病死しています。

芥川賞と直木賞の制定のほかに菊池の文学的功績は、若手文学者の育成があります。日本文芸家協会を創設して若い作家たちの生活支援を行いました。若手作家のなかで特に有名になったのが川端康成です。川端は菊池を師と仰ぎ、菊池は早くから川端の才能にほれ込み作品発表の場を与えていました。菊池は59歳の時に狭心症で亡くなるのですが、葬儀では川端が弔辞を読み、墓碑銘も揮毫しています。

創業101年を迎える文藝春秋

文藝春秋の創刊号は、定価が10銭。粗末なザラ紙に印刷した小冊子でした。

文藝春秋101年の歴史の中で、社として誇りに思っているのが、1974年11月号に掲載した「田中角栄研究」です。田中角栄の政治と金の問題を浮き彫りにしたことで、総理の座を退ききつかけになった記事です。一冊の月刊誌がこれほどまでに世間に衝撃を与えたことはなく、雑誌ジャーナリズムの存在価値を高めた画期的な

記事だったと自負しています。

月刊文藝春秋は、芥川賞受賞作品の発表誌でもあり、全文が必ず掲載されます。受賞が大きなニュースとなる作品ですと、やはり発行部数も伸びます。過去最高部数を記録したのは、2004年3月号でした。19歳の綿矢りささんと20歳の金原ひとみさんが史上最年少のダブル受賞となり、この号は3度の増刷で119万5,000部を発行しました。この時私は営業担当として書店に足を運び、山積みの月刊文藝春秋に人が群がって飛ぶように売れていくさまを目撃しました。これ以上の喜びはない、忘れられない光景です。

芥川賞受賞作が大きな社会現象を引き起こした最初が、1956年3月号掲載の石原慎太郎『太陽の季節』でした。1976年9月号の村上龍『限りなく透明に近いブルー』も大変な話題に。その翌年には、長野市出身、私の高校の先輩である池田満寿夫の『エーゲ海に捧ぐ』が受賞しています。この頃発行部数が100万部を超え、月刊文藝春秋は「おぼけ雑誌」「国民雑誌」と評されるまでになりました。

創業から現在まで脈々と息づく精神

私は、2018年に文藝春秋の社長になったのですが、社の歴史の中で編集長経験のない者が社長になったのは、私とあと1人くらいしかいません。編集の力で成長発展してきた会社で、私のような者が社長をやっているのかと悩んだこともありましたが、バトンを渡された限りは自分らしいやり方で経営をしていこうと決意しました。その第1は、人への投資です。出版社は設備投資が極めて少ないメーカーですので、人を最も大切な社の財産と位置づけています。第2に、自己実現のできる会社を目指すということです。そして第3に、社員が自由に言いたいことを言える企業風土づくりです。なかなか



100%は実現できませんでしたが、この3つのビジョンを掲げて、会社が一步でも前進するよう努力しました。

出版業界は端的に言えば、紙の本が売れない厳しい市場環境です。そこで、新規事業として食のECサイト「文春マルシェ」の立ち上げという挑戦や、「文春オンライン」や「文藝春秋電子版」「週刊文春電子版」といったデジタルシフトを本格的に進めました。

ただし、その基本にあるのは、やはり菊池寛の創業の精神です。「私は頼まれて物を云うことに飽いた。自分で考えていることを、読者や編集者に気兼ねなしに、自由な心持ちで云ってみたい。」という菊池の創刊の辞があります。この精神が現在も脈々と受け継がれています。彼は創刊15周年に際し、このようにも記しています。「根本精神は、中正な自由主義の立場にあつて、知識階級の良心を代表するつもりである」。知識階級という言葉は現代にはマッチしませんが、私たち生活者・一般市民と言い換えることができます。文藝春秋の文藝は、文学。春秋は、歳月を表わしています。権威や権力におもねることのない自由で風通しの良い誌面づくりを通して、文芸とジャーナリズムの真に価値あるコンテンツを提供することが当社の使命であると考えています。

本や雑誌と近しい人生を

今、出版業界全体がどうなっているかということを上げたいと思います。正直、右肩下がりが続いて大変

厳しい状況です。少子高齢化と同時に、大人も子供も本を読まなくなっています。小学校では朝の読書時間がプログラム化され、本にふれる機会はあるのですが、中学生になると部活が始まったりして段々本を読む時間が少なくなり、それが高校、大学になるとスマホに時間を奪われて、1カ月に1冊も本を読まない若者が増えていきます。これは、由々しきことですね。本を読む楽しみを知らず、本を読むことで得られる知識や他者への想像力、コミュニケーション力が充分でない、そんな子供達がつくる未来社会が心配になってきます。スマホの影響はとりわけ雑誌に顕著です。皆さんも最近雑誌を手にする機会がめっきり少なくなったという方が多いのではないのでしょうか。月刊文藝春秋が100万部を売り上げた時代は遠い昔です。これだけ世間を賑わしている「週刊文春」でさえ、悲しいかな実売部数は大きく減ってしまっています。

紙の出版物の売上は1996年をピークに下がり続けていますが、ここ数年代わりに伸びているのが電子書籍です。電子書籍の伸びは、そのほとんどがコミック、今はコミックをスマホで読む時代なのです。当社も、遅ればせながらコミックに本格参入して、投資と人材育成を行っていきます。

このような状況下で、当社が事業継続戦略のひとつとして位置付けているのが地方とのコラボレーション企画です。地方の絶景ポイントをシリーズで紹介する企画や、47都道府県の自治体との連動企画をウェブ上で展開したりと、様々な取り組みを始めています。長野県でいえば、松本市との共催で「地方創生シンポジウム」を開催したこともありました。地方によっては、歴史的な魅力ある街並みだけでなく、訪れる価値ある素晴らしい図書館をもつところもあります。その良い例が金沢市の日本一美しい図書館といわれる石川県立図書館です。円形劇場のような建築デザインも美しいのですが、ずらりと並んだ書

架に金沢や石川の歴史と文化の本が数多く並んでいます。カフェもあり、1日中ずっと過ごせる快適空間です。本や雑誌に最も身近に触れられるのが書店ですが、今や書店の数も急減しています。長野県は、北海道に次いで書店のない市町村数が多いという寂しいデータもあります。

本は幅広い知識を得たり視野を広げるだけでなく、一冊の本との出会いによって人生がガラリと変わることもあります。皆さんにはぜひとも、本と近しい関係を築いてほしいと願っています。本日は、どうもありがとうございます。

